「私はなぜ私なのか」という問いを継続して考える要因とは？

―大学生を対象とした質問紙調査より―

天谷祐子
（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）

【目的】

児童期後半から中学にかけて、約半数の人に見られる「私はなぜ私なのか」という問い―自我体験―は、経験された後も継続して考え続ける人とそうでない人が存在する。この 2 種の人の間にはどのような違いが見られるかについて、本研究では、認知的要因(状況依存的記憶や構造拘束感の程度)と、生き方･学校享受感の違いを使って明らかにする。

【方法】

調査協力者：大学生 284 名(男性 113 名、女性 169 名、不明 2 名、平均年齢 19.44 歳(SD2.96))

質問紙 : (1)自我体験の経験の有無や経験のされ方を問う項目：自我体験の内容を示した質問項目 15 項目(5 件法,天谷,2005,項目例 :「自分はなぜ自分なのだろう？」)を提示し、それと同じような問いについて考えたことがあるか否かを尋ね、その後その内容について自由記述を求めた。さらに、現在も考える程度 1 項目、体験時の深刻さをたずねる 3 項目(例 : その頃、A(体験内容)について深刻に考えた)と、体験時の状況依存的記憶の程度 4 項目(小田部,2011)、体験後の主観的な自己成長感を尋ねる 4 項目、自分なりの答えが出た程度 1 項目に 5 件法にて回答を求めた。(2)構造拘束感尺度(高沢･伊藤,2009) :「ネガティブな体験内容が反復し暗黙の機能が停止している様式」(高沢・伊藤,2009)を測定する尺度である。その中で「反復性」因子(項目例 :「自分の悩みによってがんじがらめになりやすい」)8 項目を使用した。(3)学校享受感尺度(古市・玉木,1994)：学校適応感を「学校生活を楽しく過ごせているか」という視点からとらえようとする尺度で、「学校は楽しくて、一日があっという間に過ぎてしまう」等の 10 項目からなる。(4)自己報酬追求型生き方尺度(石田・神保・中山・石建・岡本・植松・野間・樋口・小森,2008)：「本当の自分に気づき、人と愉しく、自分を満足させる生き方」(石田ら,2008)を追求しようとする生き方を測定する尺度である。「積極的自己報酬」因子と「多様性受容」因子の 2 因子 14 項目から構成される。

【結果と考察】

(1)自我体験の経験率：自我体験に関する質問項目の評定と自由記述内容により全調査協力者を「体験群」(自我体験の経験の有無を尋ねる質問項目のうち少なくとも 1 項目以上に高い評定が見られ、かつ自由記述内容が自我体験に相当するとされた者)、「未体験群」(自我体験の経験の有無を尋ねる質問項目の全評定が 5 段階中 3 以下、かつ自由記述が見られない群)、「未確定群」(自由記述が見られた者のうち、その内容が「体験群」とみなされなかった者等)の 3 群に分類した。その結果、「体験群」は 63 名、「未体験群」は 69 名、「未確定群」やその他の者が 152 名となった。全調査対象者における自我体験「体験群」の割合(「経験率」)は 22.2%であり、先行研究における値と比較するとやや低い結果となった。

(2)自我体験を現在も継続して経験しているか否かと未体験者の間の差 : 自我体験について、「現在も考える程度」を尋ねる項目(5 件法)の「4」「5」を選択した人を「体験継続群」、「2」「1」を選択した人を「体験終了群」とした。この 2 群に自我体験「未体験群」を加えた 3 群間で、構造拘束感、学校享受感、自己報酬追求型生き方の尺度得点に違いが見られるか否かを 1 要因分散分析により検討した。その結果、構造拘束感尺度において主効果が見られた($F(2,131)=10.78, p<.001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「未体験群」・「体験終了群」よりも「体験継続群」の方が有意に得点が高かった($p<.05$)。

(3)自我体験を現在も継続して経験しているか否かによる自我体験の経験のされ方の違い：「体験群」のみについて、「体験継続群」と「体験終了群」の間で自我体験経験時の状況依存的記憶の程度に関する尺度得点・自我体験に関する「自分なりの答えが出た」程度の得点・体験当時の「深刻さ」得点(3 項目の合計得点)･「自己成長感」得点(4 項目の合計得点)に違いが見られるかについて、t 検定を行い検討した。その結果、状況依存記憶得点・深刻さ得点・自己成長得点について、「体験継続群」の方が「体験終了群」よりも有意に得点が高かった。自我体験を考え続けるか否かには、自我体験の問いに自分なりの答えが出るか否かには関係がなく、自身で体験当時の様子がよみがえるような形で深刻に考えたり、自身の体験に主観的に成長したと認識していることが寄与している可能性がある。また自我体験を考える際の構造(思考パターン)にしばられて反復して考えやすかったり、問いとの距離を十分に取りにくいために、その後も考えてしまうという可能性が示された。